



でしようね」と苦笑する。

「ふきだし湧水」に関する史料はほとんどないが、1928（昭和3）年ごろ岩内町の豪商、梅沢富士郎が湧水一帯の土地を龍門寺に寄付。同寺の松田玄龍和尚が東俱知安村（現・京極町）に寄贈するとともに、観音像を建立し霊場とした。以来、住民は湧水を「観音様の霊水」としてあがめてきたという。

利用は一部の住民にとどまっていたが、85（昭和60）年に環境庁の「名水百選」に選ばれ、名が広まった。おいしい水を求め、湧水のある「ふきだし公園」を訪れる観光客が急増し、98年度に100万人を突破。昨年度も103万人が訪れた。後藤田さんは「ここまで有名になるとは思わなかった。自然が与えてくれた宝物です」と笑顔で話す。

暑さが本格化すると、湧水をくみに札幌や本州から訪れる人々の列が長さを増す。多い日は1日に6000人も詰めかけ、昨年は8月だけで12万5666人。豊かな自然がじっくりと生んだおいしい水が、今日も多くののどを潤している。

Data

蝦夷富士と呼ばれる羊蹄山に降った雨や雪が濾過され、地中のミネラルを加えながら50～70年という長い時間をかけて、きれいでおいしい水になる。水量：1日約8万トン（約30万人の生活用水を確保）水温：年間を通じて6.5℃前後



●お問合せ先

京極町企画振興課

Tel.0136-42-2111

めてきた。

83年から公園整備に着手し、約7億円をかけて93年に「ふきだし公園」を造成。水くみ場や散策路、アスレチックコースなどを設け、湧水の素晴らしさをPRする名水プラザを建設した。町は、ふきだし湧水にちなんだ観光祭りを毎年春と夏に開催。特に7月下旬の「しゃっこいまつり」には2万人以上が詰めかけ、町は活気に包まれる。

ふきだし湧水の水は民間企業の手で日本酒や豆腐、氷、ミネラルウォーターなど特産品に姿を変えた。同町の後藤田企画振興課長は「町づくりのためにもっと湧水を活用しPRすればいい」という意見もある。でも私たちの務めは、与えられた宝をきちんと次の世代に引き継ぐことだ」と語る。